

## 巻頭言

## 「あの時の仲間の姿は一生忘れない」

大高 研道 (明治大学教授/協同総合研究所理事長)

表題は、よい仕事研究交流全国集会 (2021年2月27-28日) 初日のパネルディスカッションにおける東埼玉総合事業所 (旧羽生事業所) 報告の最後にエリアマネージャーのAさんから発せられた一言である。1983年に羽生総合病院の清掃から始まり37年間建物メンテナンスと給食事業を担ってきた旧羽生事業所は、2020年9月をもって業務契約が打ち切られた。最終日まで業務をやり遂げ、その後急いで事業所の片付け・引越しを仲間とともにしたその時間と空間は、さまざまな思いが込められたものであったと思う。理不尽な病院の対応への悔しさ、やるせなさ、そしてそれでも契約最終日までちゃんと自分たちが大切にしてきたよい仕事をまっとうしようとした「仲間の姿」に、私は協同労働の原風景を見たような気がした。

ワーカーズは、困難に直面した時とともに闘った、ともに助け合ったという経験を数多くしている。1990年代には組織統合を進める生協の物流センターの業務縮小・停止が相次ぎ、ワーカーズは経営危機に陥った。近年では増加する指定管理者制度等による公共サービス業務契約を巡る理不尽な行政の対応など、私が交流の機会をもってきた事業所だけでも両

手で数えきれないほどの悔しい思いをしてきた。

その一方で、不死鳥のように甦り、さらなる展開を見せている実践もある。私は、そこには、仲間との協同体験を語り継ぎ、その経験を集合的記憶として現場や地域に根づかせていった営みの積み重ねがあったのではないかと感じている。つまり、困難に直面した際に助け合ったという経験を一過性の絆や思い出にとどめずに、持続的な対話的協同の文化として蓄積してきたからこそ、よりしなやかで強靱な協同が形成され、力を発揮してきたのではないだろうか。

一般的に協同組合は、共通利益の実現のために協同する個の塊と理解される。ここで言う共通利益とは、市場交換価値にもとづく「利益」を意味しないことはあらためて述べるまでもないが、人間らしい働き方や社会の実現をめざしてきたワーカーズは、その歴史的蓄積のなかで、個別利害の共通性を超えた「協同することの価値や楽しさ」を身体化しつつあるように思われる。このようにしてみれば、「仲間の姿は一生忘れない」という思いの塊もまた歴史的な文脈で語りうるものになる。もし、このような解釈が可能であるとすれば、本研究所報の「協同の発見」

という言葉には、40年を超えるワーカーズの歴史に「埋め込まれている協同の力」を引き出す、再発見するという要素が含まれているといってもよいだろう。

期せずして、本年6月の協同総合研究所総会において理事長を拝命することになった。労働者協同組合法が成立し、協同総合研究所(以下、協同総研)設立30周年の節目の時期の大役に荷が重いというのが正直な気持ちである。

協同総研が設立された1991年3月、私は大学を卒業(卒論テーマ『協同組合原則の現代的意義』)し、大学院に進学した。偶然にも協同組合研究の世界に足を踏み入れてからの30年間を協同総研とともに歩んできたことになる。院生時代は、『協同』のための北海道集会(1995年)に事務局員として関わり、その前後に故菅野正純さんが北大社会教育研究室の集中講義にも来てくれた。菅野さんとの出会いは衝撃的だった。世界の労働者協同組合運動から学ぶためイタリアの現地に赴き文献も原典にあたる等、その飽くなき探

究心と博識にはただただ圧倒された。

その後、私自身がワーカーズの実践に本格的にコミットするようになるのは、富沢賢治先生の後任として埼玉にある聖学院大学に着任した2006年以降となる。協同総研の歴史の前半は先達の熱意を地方から感じ、後半の15年間は、笑顔の背後にそれ以上の苦労や涙を抱えながらも前を向いて歩もうとしている多くのワーカーズの仲間との出会いを通して、協同労働の研究を生涯のテーマに据えることに確信をもつことができるようになった。

協同総研は、研究者と実践者が学び合う「協同労働の協同研究」の場として生まれた。私自身は、これまでと変わらず現場に足を運び、ともに悩むことしかできないが、新たな時代の協同労働運動を支える実践理論の構築と次世代への橋渡しを託されたと受け止めている。これからも研究者・実践者という垣根を超えて学び合い、対話を諦めない協同労働の世界の広がりや発展に少しでも貢献できればと祈念している。